

日本人と温泉

中村昭

一 縄文時代と温泉

考古学者の故藤森栄一氏によると、昭和三十九年に長野県の諏訪市駅前の実ペートの工事の際に、硫化して黒くただれた安山岩の間に土器片や石斧などがはさまった状態で出土したことから、縄文前期時代(今から約七〇〇年前)の人が既に温泉と関わりがあったのではないかと推定している。また同氏によると、昭和三十五年に上諏訪の三の丸温泉の工事の際には、今から約四〇〇年前の縄文時代中期の加曽利式の土器片が湯にさらされて完全にボロボロに硫化した状態で発掘されたのである。また上諏訪及び下諏訪は現在でも温泉の湧出量の豊富な所であるから、縄文時代の人が温泉に親しみこれを利用した可能性は大いにあったであろう。

また東北地方にも縄文化が栄えたことは最近の青森の三内丸山遺跡の発掘等によく知られているが、その隣の秋田県鹿角市の大湯温泉に程近い所に、大湯環状列石(ストーンサークル)という縄文時代後期と推定される祭祀場遺跡がある。これを造った縄文時代人もおそらく大湯温泉に入浴したのだらうと思われる。

二 弥生時代と温泉

群馬県の草津日根山の頂に近く海拔約一八〇〇mの所に万座温泉がある。二に古くから「熊四郎温泉」と呼ばれた温泉があった。群馬県の温泉史の研究者であつた萩原進氏は二は古代の人が利用した所ではないかという推定のもと、昭和二十一年に発掘調査をした。その結果、何層かの炭層の下に御目波扶文を

持った弥生式土器の破片を発見した。弥生時代人が定住したのはもつと低地の稲作地帯であるから、二は住居跡とは考えられない。二はおそらく弥生時代人を始め昔の人が万座温泉を利用した時に仮泊した所だらうと推定された。

二からあまり遠くない長野県の菅高原(約一四〇〇m)の洞穴からも弥生式土器が発見されたという事である。縄文時代人や弥生時代人の行動範囲が非常に広がったことが最近実証されているので、温泉に入つた位で驚くべきではないかも知れない。日本人はまさに神代の昔から温泉に入っていたのである。

三 飛鳥・奈良時代と温泉

次に時代は下るが、「万葉集(卷三)」にある山部赤人が伊予の温泉(遺後温泉)を詠んだ長歌並びに反歌を引用する。

すめるきの神の命の 敷きるます国のことと
湯はしも多にあれども 鳥山の宜しき国と 擬しか
も伊予の高嶺の 伊弉庭の岡に立たして 歌思ひ辞
思はしし 万湯の上の木群を見れば 巨の木も生ひ
継ぎにけり 鳴く鳥の声も交らず 養老代に神さび
ゆかひ 幸しとこる

反歌

もしきの大宮人の 鞆田津に
船乗りしけむ年の 知らなく

この長歌は、遺後温泉を訪れた赤人が彼よりも一世紀も昔に二を訪れたと伝えられる聖徳太子の傳へで詠んでいるのである。また反歌の方は半世紀をした。その結果、何層かの炭層の下に御目波扶文を

四 平安時代と温泉

平安時代の初期に真言密教を興した弘法大師・空海は、伊豆修善寺温泉の独鈷の湯を始めとして温泉発見の伝説ではスカーナなのであるが、同時代の記録では温泉との直接の結びつきはあまり見られない。しかし山岳修行をしたことは事実であるから、温泉発見の機会は多かつたらう。

伊予の湯(遺後)はこの時代にもよく知られていた。この頃は現在とは大分様子が違い湯を大きい井桁で仕切つてその中で入浴していたらしい。この井桁の数が多いというところがもの響えともなり、「源氏物語」の「空蟬」の巻ではある女性が因幡をやって石の音を

程前の額田王の歌を踏まえて詠んでいる。
なお「万葉集(卷十四)」にあるもう一つの温泉の歌は次の東歌で、これは相模の湯河原の湯を詠にしただ彦歌である。

足柄の土肥の河内に出づる湯の
世にもたよらに見るが言はなくに

また奈良時代の温泉の資料としては「風土記」の記述を見逃すことができない。今(豊後國)風土記から別府温泉の所を一部分だけ現代語に直して引用しておく。

玖佐理湯の井
この湯の井は郡役所の西の河直(鉄輪)山の東にあり、口径は一丈余りある。湯の色は黒く、泥土が常には流れない。人がひそかに井のほとりに行つて大きな声をあげると、響き鳴つて二丈余りも噴き上げる。その蒸気は非常に熱くて近づくことができない。周囲の草木は皆枯れ萎んでいる。